

---

世界トリップなんぞいう乙女ゲームのような状況におかれているんですか 30字以内で説明し

mikoco

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

なんで私が異世界トリップなんぞいう乙女ゲームのような状況におかれているんですか30字以内で説明してください。

### 【ZINEID】

N7402R

### 【作者名】

mikoco

### 【あらすじ】

私、篠原未依はギャルゲー大好き！なちょっと危ない14歳。

乙女ゲームユーザーさんにただ平謝りするばかりなくらい、乙女ゲームが苦手です。魅力が分かりません。

ちょ、だからなんで私が異世界トリップしてるんですか？逆ハーレム？最初の一文字りません。

ちょっと今月発売のギャルゲーどうしてくれるんですか！

魔王？んなもん知らんわ。

この小説はあくまでも主の趣味半分で書いております。  
生ぬるくみまもってやってください。  
主人公史上最強？！

異世界トリップ。

まあよくある乙女ゲームの展開ですねわかります。

つていう感想くらいしか持てない駄目人間。

それが私、篠原未依しのはらみいだつたりします。

でもね、全国の乙女ゲームのユーザー様

「めんなさい。

乙女ゲームの魅力がわかりません。

絶対にギャルゲーの方がいいと思うんだ。

18禁でもいいんだよ。

だからこそ謝つておきます。

ぜつたに切れ長の男の人の絵よりも萌え絵の方が好きなんだ。

こんな自分が異世界トリップして「めんなさい。

まずは、ことの経緯を話そうではないか。

それは入浴中でした。

明日発売のギャルゲーのことを考えてハアハアしていました。

そしたら、なんとまあ氣絶しました。

ここからは乙女ゲームちっくかな。

天使だか神様っぽい人に聞かれました。

「助けてください。」

なんですか。つかなにをですか。

「私は、この世界とは違つ【異世界】の神です。

神は、直接世界に干渉することは出来ないのです。

だから、お願いです。

「私の世界を助けてください。」

なにを言つてゐんですかこの人は。

どこの厨でですか。

「では、貴方を強制的に飛ばします。

貴方は今日から【導く者】です。」

なにこの人。

どこのまでも人の話を聞かないおっちゃんですね。

せめて萌えキャラの姿で登場しろよ。

そんなことを考えていたら、

ぱちんっ！

意識を失っていました。

「アリババ！」

はー。

意識が戻りました。

なんですか。フツーはもつ少し前ふりがあるでしょ、うね。

つか自分はわざとまで風呂に入つてましたのに、

髪もかわいて、ローブっぽいもの着てて、なんとかがむけの中央魔導使みたいな服は。

「みんな、にんげんさんがいるよー。」

あらあら、なんだかかわいらしい声が聞こえます。

「ほんとだー。」

「こりこりのおとねだー。」

ちゅうとまわせ。

なんだ【こりこりのおとね】って。

「えつと……。」

私は呆然とするしかあつませんでした。

だつて小人みたいな半透明なひと(へ)達がたくさんいらっしゃるよ。

さすが異世界！

まじでふつちー。

「皆ー漆黒の乙女が怖がっていますよ。

落ち着きなさい。

始めまして、漆黒の乙女。

私は【始祖精霊】の一人、空間の精霊です。」

「はー。はじめまして？」

なんか空間の精霊さんがお辞儀をされましたよ？

「貴方は、まだ何も知らないのでしょうか。」

あのへボ神め。つたく適当に飛ばしゃがつて。人をなんだと思つて  
んだー？」

空間の精霊さん。貴方とは気が合ひやつですよ。

「私達は、精霊。

この世界では神以上に尊い存在とされてーます。

精霊は存在するすべてのものに宿ります。

そして貴方は【漆黒の乙女】。

私たちを司る、精靈にとっては【神】同等の存在。」

「は？」

そのとき私の口は大きく開いていたことでしょうね。

異世界にきて早々、神様よりも強い存在から、【神】っていわれました。

「えーっと。人違い、ですよね？」

「いいえ。

私たちの姿は神官以外の一般人は見えませんし、貴方のその黒髪と黒い瞳はこの世界ではありません。

つまり、漆黒は特別一。

漆黒の乙女だけが、私たちを駆使して戦えます。

その魔法を【夢魔法】といつのです。」

なんですかとりあえず異世界ってこんなに厨二くさいんですか？

「まあ簡潔に言えば、

貴方はヘボ神に選ばれてこの世界にトリップして、やがて【漆黒の乙女】とこう精靈を司る役割を与えられました。

あなたはその力  
【夢魔法】  
を駆使して、この世界を救わなければ  
なりません。

### その3本柱、

【導く者】、【繋げる者】、【伝える者】の一つとして。「

「えーっと、辞退は？」

「無理です」

ですかね。

長々と説明ありがとうございました、空間の精靈さん。

「全ての元凶は、あの神様にあるんですね?」

一  
はい

・・・次あつたらボコル。

一  
は  
あ  
」

どうおえすかんでいいですか？



「めん。

やつぱり可愛く「キヤーー」とか言いつの無理だわ。

とりあえず現状整理と行こうではないか。

私は篠原未依。14歳。

乙ゲーの主人公のように、眼鏡はずせば美少女！

とか、本人は気がつかないけど実は美少女！

なんていう素敵なスペックは残念ながら存在しません。

今日の前にいる精靈さんはについて。

空間の精靈さんは目を見張るほど美しい。

バックに光とかありそなくらい神々しい。

ギャルゲー的には、主人公になにかとアドバイスをくれるわけあり（ドS）美人養護教諭つて感じ。

んでその周りにいる精靈さんは。

コロボックル。

こんな表現がぴったりなくらい可愛い。

アニメキャラがデフォルメされたちびキャラみたいな。

うん。

とにかく可愛い。

「かわいいは正義!」

「漆黒の乙女……?」

空間の精靈に怪しい田で見られました。

『めんなさい。

「えつーと。私は篠原未依、です。

漆黒の乙女とか呼ばれるの好きじゃないから、

『いってよんでもうだれこ。』

「わかりました。ミハ。

では貴方には世界中の精靈たちとまとめて

【契約】して頂きます。

精靈たちに認められて初めて真の【夢魔法】の使い手となるのです。

あー。

よくある（のか？）ルートですね分かりました。

「では、貴方の本能に従つてください。」

は？

「貴方は【導く者】なのです。神がどう選んだか知りませんが、貴方には資格があります。

【導く者】よ、今扉を開くのです。」

ちゅー————！

意味分かりません。

えーっと、なんですか？

いきなり振らないでください。

私の専門は学園系ですよ？

アドベンチャー系RPGは2、3本しかやったことないんですよー。

もうこいや。

本能に従いましょうか。

でも下手に難しい言葉使うのも得意じゃないんだよね。

汝とか、我とかもつわけわからん。

じゃあ普通にこよもしょい。

切たつて砕けろ！

「世界中の精靈やーん！

聞こえてますか！

はじめまし。

私はさひせいの世界にトロッパしぬやつた漆黒の乙女の篠原未依つていいます。

今の感想は、正直難しいものを押し付けられすぎて困ります！

つていつ動搖だけです。

【漆黒の乙女】 だかなんだか知らないけど、

とりあえず使えるものは使うが私のポリシーなんです。

だから、私に力を貸してください！

世界を救うのが恩返しになるんだつたら、まあほんまちがんぱります。

嘘をとつてもかわいいし・・・ってあれ何嘘つてんだろ？

私は勇者でも世界の救世主でもなくただの篠原未依なんですが、

押し付けられちやつたし、なんだか楽しそうだし、

とにかくがんばりたいんです！」

なんだか、だんだんいろんな気配が近づいて気がします。

重たい？ゼンゼン。

むしろあつたかい。

「だからお願ひ！力を貸してください。

ちょっと私服を肥やすへりこのことになると想いますが、

悪用はしません！

助けてください！お願ひします。」

『ミイよ。漆黒の乙女よ。

汝の願い、聞き届けたぞ。

我ら世界を司る精霊は、汝に力を貸そつ。

精霊の力は強大だ。

しかし、汝は必ずこの世界を【正しき道】へ【導く者】だと我らは確信した。

汝は我らを囲り、我らは汝を護り貫いつ。

汝はだれだ？

「私は 」

「すげー————！」

頭の中に直接響いてくるよ。

つかこの精靈さんすげえかっこいいぜ。

私もこんな感じに演説したかつたわ。

なんかもつ口が勝手に動くよ？

「私は、【導く者】！」

『導く者よ。忘れるでないぞ。

汝は我らと共にあり、決して独りではないのだと 』

ぱちんっ！

あー。

またこの音か。

意識がどんどんどんどん薄れて・・・。

切れました。

「んひ・・・・~」(めまい)

別に。

草原の上にねむりがつているだけでした。  
体中がぽかぽかしています。

もしや!

私、もう魔法使えんの?

すげえ!

『精霊・・・さん』

『なあに?』

『あ、いるんだ。これからよみじくなつ~』

『『『』』』

たくさんのアンサンブルが聞こえたのは、気のせいではないだろ?、

と迷つた。

#2 (後書き)

とつあえず、

「めんないww

とつあえず、『リリカル』ですか？

残念ながら私は方向音痴なんですね~。

まあなんとかなるでしょ~。

「ん？」

ちよつ！

田の前に瀕死状態の黒猫がいます。

これは、かわいそうです。

猫さん。

申し訳ないけどわたしの魔法の実験台になつてください。

「 治癒 」

指先を猫さんに足あと、エネルギーを放出するイメージで。

すると、みるみるうちに傷がふさがつてこきます……。

すつ、すげえー！

「 洗浄 」

血の跡とがが消えていきます。

なにこれ、半端ないわ。

魔術つてもつとめんぢへといものかと思つてたけど、意外に簡単ですね。

「・・・」や?」

黒猫さん、田を覚ましたね。

「君が、僕を治してくれたの?」

喋つた。

もつここせ。

異世界だしなんでもあり。

ほら、あの狸型の青いロボットもしゃべるから問題ないよ!

「やう。ちょっと試したくて。」めんね?」

「ひひん。ありがとひーーのい應は一生忘れませんーー。」

そうつか。

いやー。ひつひも実験できたし。

「僕は一生貴方に仕えます！…！」

ちょいまぢー！

はい？

だから、君達は気が早いんですよ。

残りの人生をこんなゲームに費やすって？

「僕は…。もつオオカミに襲われたとき死ぬ覚悟でいました。

でも貴方が助けてくれたからこの命はあるんです！」

ならば残りの全ての人生をかけて貴方にお仕えするまでです！」

えーっと、うんやめとき？

「お願いです！」こんな僕では…ダメ…？」

そんなうるうるの瞳はやめて。

わたし、小動物に弱いんです。

「わかりました。えーっと、名前は？」

「ありません。貴方がつけて、ますたー。」

ちょー！

「いま「ますたー」にときめこちやつたよ、粗手は猫さんなの！」

「じゃあ・・・伊織。」

別にアイドルマ ターの某積ツンデレツからとつたわけじゃないんだかねっ！

「イオリ・・・ですか！すばらしい名前ですーありがとうございます！」

「じゃあ【使い魔契約】をしまじょー！」

また契約か。

猫さん（伊織）の前足が突き出される。

「僕、イオリ＝シノハラは生涯貴方にこの身を捧げ御仕えすることをここに誓います。」

そして伊織が私の鼻をペロリと舐めました。

かわいいなあ。

「契約の精靈よ。我らを祝福したまえ。」

すると、

「ほつ、と光が私達をつつみました。

そしてなんか変形してますよ、伊織さんよ。

光が消えるとともに、私の伊織君の変形は完了したようだ。

彼（？）はなんと人型になつてました。

栗色の髪の毛に茶色の瞳。

顔はどこかのアイドルですか？みたいな

うん美形。

でもね、でもね問題はそこじゃ ないんだ。

彼は見た目11歳くらい。

つまり

ショタなのですよ……………

……………

男の娘……………

しかも猫耳つ……………

やばい……………

この瞬間に初めて異世界トリップしてよかつたと思いましたね。

「よろしくおねがいします。 ますたー。」

だらだらだら。

鉄つぽいこおー。

そして私は、

氣絶しました。

「ますたあー？！大丈夫ですか？！」

なんですか伊織きゅん。

そんなうるうるのめめめで見つめられたら赤い液体が出でしうじやないです。

「ああ・・・。うふ。『めん、ちよつと疲れがたまつて』。『

いま』の瞬間に癒されましたけど。

「ますたあー-----」

あわ。

ああ、至福だあ！

抱き疲れたよお。（ハアハア）

ちひよ。

変態つぽいですね。

うん。

ちひよと情報操作。（自己暗示ともいつ）

いおりきゅんはかわいいけどせめいたり画面の中の女たちに失礼じやないか？！

私は一次専になるつて、きめたじゅん！

小学校のとき男の子に振られてから・・・。

「うん。大丈夫！」

「伊織つてちひよと聞いていくし、本当の名前つていつとまざいんじゃない？」

「はい。使い魔の名前を主人が呼ぶときには自動的に魔力が込められるんです。」

やつぱり。

「じゃあ私はイオつてよぶから。」

「はい……あすたあーーー。」

わたしは異世界トリップ一日目で、かわゆい男の娘（猫耳付き）を使い魔にすることが出来ましたっ！

#3 (後書き)

これが書けたらもうなんでもいいや。ww

まず情報整理とこきましょ。う。

「イオよ。」

「なんですか?…ますたあー?」

この娘はなんでいちいちこんなにかわいいんだろ?う。

神様。(。。(グッジョブ!-!

あと萌えキャラとが出してくれたら拌むから。

「えつーと。イオは私がだれかわかる?」

「…。」

なんですかこの沈黙は。

つかそんなに見つめられたら照れるじゃん。

「ますひ、ますたあーは【漆黒の乙女】なんですか…?」

「うふ。ううひじこよ。

あともうひとつ。なんだっけなあ…。

あ、あれだ。【導く者】だっけ?「

「三本柱の一つかなんですか？！」

「あと、伝説の【夢魔法】の使い手とか・・・？」

「なんなんですかますたあつ！」

半泣きの状態でイオは私に訴えてきたよ。

かわいい・・・。

「僕なんかがますたあーの使い魔になつていいんですか・・・？」

「うん。」

「ごめん即答します。

だって、猫耳ショタなんてそんなナイスすぐるモノを手放すわけにはいきません。

それに癒しだし。

「ますたあーは優しいんですね。」

「ありがとうございます。」

実は下心しかないけどね。

あ、抱き枕になつてもらおつ。

今愛用しているまつんちゃん抱き枕は家だし。

「とつあえずー。

身を固めなくちゃね・・・。」

そう思つていたときに、パカパカと馬の音（複数）が聞こえてきた。

「お前は誰だつ？！」

てめえこそだれですか。

「我々は王家直属の白騎士団だぞ――――――――！」

そんなの知らん。

「えつーと。このわたしを誰だともひてるんですかあ？」

よし。れつ水戸黄門！

「この黒髪が目に入らぬかー。」

「まさか貴方は・・・。

【漆黒の乙女】・・・？」

ざわつらこと！

「我々はなんと失礼なことをしたんだ。

乙女よ、どうか我々をお許しください。」

水戸黄門「す、げーーー！

「どうあたえず、わたしは王様（？）に謁見するべきだとおもうのです。

だから、わたしを王宮に連れて行つてくれますか？」

そういうやうに森のなかだつたなーなんでおもいつつ騎士団（？）をにらむ。

騎士団つてコレーベンツのぶんぶんいつてゐヒトしかおもいつかねー。

「 もへ、 もちろんですー。」

どうせども。

「あ、ちなみに王家に女の子つてありますか？」

「うう重要だからねー！

ううドフラグを建設できるかどうかが問題で・・・。

「いえ。王家には女性はいらっしゃいません。

女王陛下は若くしてお亡くなりになり、お子様は男の子 3人の王子 しかおりません。」

ちつ。

「ジジンティレ王女様に

『あ、あんたのことなんか全然頼りにしてないんだからちつ・・・。

かつこいいなんか思つてないんだからね!』

みたいなことを言われたいと切に願つていたのに・・・。

またはドリ女王・・・。

「それがどうかなされましたか?乙女。」

そんなことも知らんのかといつて見られてるけど仮にしない!!

「いえ。わたしはミイつてこります。よろしく。」

王子か・・・。

「ジドルート的に逆ハー成立しそうで怖いな。

てかここしかないだろ!逆ハー。

ここを突破すればいいんだあ!

うん。

とつあえず王室コレツツゴー!

もしかしたら女装好きの王子とかいるかもしれないしつ！

## #5 (前書き)

今回はさりと短めです。

てつててーん。

王宮に到着しましたあー。

いやあー。

ある程度は予想していたけどね、これはデカイ。

うん。もつ超でかい。

どれくらいこって・・・小学校×200くらい。

でも、それを顔にだしたら負ける気がする。

「ま、ますたあー？」

イオ（人型）はかなり緊張しているみたいで、ブルブル震えています。

「どうしたの？」

「ますたあーは緊張とか、動搖とかしないんですか？」

すでに異世界トロッپしている時点でもう同様しないし。

なんでもありだよ。

「しないね。」

キリッとしたやんと効果音が聞こべるよ! ひっ立つたよ。。。

なんかそれよつたあ、 いの騎士団めいかや ひっ立つてゐるんですけど。

自分あんまり立つのあじや なこんですょな。

むしり嫌いだから。

あー ゆー おー けー ?

そういえば、 なんで私異世界の言葉とかしゃべつてんの?

実は日本語が世界の共通語ですか言われたらキレるよ?。

『僕が通訳してこるんだよ。 もう。』

頭の中に声が反響します。

『僕は【言葉】の精靈。

『他の言葉をこの世界の言葉に【置換】してこるんだよ。 もう。』

ナイスつー!

なこの子めいかや 使えるんだすナビ。

簡単に言えば無期限のほんやくこやくを食べたつてことです。

『文字はさすがに無理だけどね。』

わかりました。そつちは頑張ります。

「ミーハ様。しありの門からお入りください。」

了解した。

「イオ、こいつ。」

私が通されたのは王様たちの部屋ではなくめつりや豪華な更衣室でした。

まつ、まさかこのルートは……。

「ミーハ様。」

ひつ。

そこにはたくさんのメイドちゃん(?)がいらっしゃいました。

「そんな泥だらけの格好で国王をまごてて謁見するなんてありえません。」

「

たしかに泥だらけですよ。

だけど。

まさかドレスとかに着替えるなんて言こ出すのでは・・・。

そして私は剥かれました、裸に。

「まあなんて艶やかな髪なんでしょう・・・。」

別に手入れとかしてないです。

風呂に入れられて、髪にじられて、化粧されて、

そして私はメイドさんたちの着せ替え人形にされました。

「ではこの服を着てください。」

そうこうして見せられたのは、ふつうふつのまつパンクのドレスでした。

「起つですっ――――――――――――――――

ドレスなんて着たことないし、無理です。

メイドさんたちを押しのけて、クローゼットに向かいました。

とにかくとにかく一番マシな服を探します。

一番マジ……。

残念ながら真っ白なワンピースしかありません。

でも模様とかないからこれでいいや。

「これにしますー！」

てつてけてーん。

マッハの速度で着用しました。

有無をいわせないうち。

はこきました。

多分いままで最高記録なんじゃないですか？

「どうですか？」

思わず聞いてしまいました。

だつてみんなが畠然としているんですから。

きっと・・・あー、残念すぎでつことですね理解しました。

「う、美しいです。」

ぎつぎつで言いましたね。

田が点になつてゐるもん。

「 IJの靴を履いてください。」

そこでわれました。

そこにはワンピースと同じく真つ白な靴がありましたね。

微妙にヒールになつていますが。

「 ありがとうございます。」

ひとつめのメイドさんに連行されました。

なにこれめっちゃ歩きこくいんですが。

私はニーカーでLOVIEながら仕方ないか。

迷路みたいにぐるぐる回つ、そして一つの扉の前に立ちふさがりました。

「 ああ、 IJです。 ミイ様。

「 ここには3人の王子様と、わが国の王がおります。」

いまさらながら後悔してきました。

そして扉をおもこつきつ開けました。



扉を開けて、私はこの世界に来て初めて後悔しました。

ふんふんするんだもん。

フラグの建つ匂いが・・・。

仕方がないので、すたすた歩いてこまました。

「よひいな。【漆黒の乙女】よ。」

・・・。

もひやだ。

えーっと、簡単に説明すると

私が今いる部屋には王様と王子様（×3）がいるわけで、

しかもみなさんハイパーイケメンなわけ。

よくある乙女ゲーム的な展開。

むしろこの世界はもひひゲームじゃん。

やだ。

登場人物Aでもなんでもいいからギャルゲーがよかつた。

でも来りやつたもんはしゃーないし、適当に挨拶でもしておいたつか。

「はじめまして。私は【漆黒の乙女】です。

【漆黒の乙女】って呼ばれるのは大嫌いです。

名前は篠原未依。苗字が篠原で、名前が未依です。

ミヤツヒ呼んでください。

異世界から来た善良な一般市民ですので、マナーとかわいこいのは  
まったく持つてしりません。

「どうぞよろしくおねがいします。」

それどうだ？

リリードで冷たく適切にあしらえばフラグは建たないだつてー。

悪いな。

だつて家に私の嫁たちがいっぱい待つててくれるんだもの。

てめえらみたいな現実（リアル）にお付き合いしている暇はないんだぜ――

すると王様がお腹を抱えて笑い出した。

「ミヤ殿は面白い方じゃのつ・・・。」

ちよ。なんだよ。

「わらわには全て聞こえておるのじやよ。」

はあ？ なんだよこのクソジ・・・。

おつといけない。丸聞こえだつた！

「わらわはこの「キノスの国」の王。

アーサー＝「キノスだ。

ほれ子供達。汝らも挨拶しろ。」

アーサーつていつと某英雄を思い出すなあ・・・。

つかよくわかんねー。

とつあえずこのひげもじやが王様で。

「たしかにこのひげはむちと邪魔なのじやよ。」

まだ聞こえてるのかよ！

でもこのじーちゃん個人的に好きだわ。

「私はエドワードと申します。

曲がりなりにもこの国の第一王子を務めております。」

うわー。

なにこのザ・イケメン（田村みのりな）。

かつてよく云うと物静かで知的？かしいそーな人だ。

物腰が柔らかい。

あわれもない言い方をすると、流れやすそうな優男ですねわかります。

「つべく・・・。

じーちゃんはダダ漏れっぽいよね。

なにも言わないけど。むしろ笑ってるけど。

「俺はアレックスだ。第一王子。

騎士団の隊長をやつてる。腕う節はこの国で一番だぜ？

うわー。

ドンドン。

熱血そーで松岡修造みたい。

これで、ココマツチヨだつたら多分吐いてたな。

まだ細マツチヨでよかつたね。

でも、この人たぶんお腹真っ黒だよ。いろんな女人の人を弄んでそう。

「・・・レンバルト。第三王子。」

それだけ。

この王子様、相当無口みたい。

でもこの王子様のなかで一番好印象だよ。

「ミマ殿よ。よくぞわが国に参った。」

いやー。ただこの国に落とされただけですよ？

「そなたはなかなか、いや。かなり面白いのう。

わが子たちを初対面であれだけ罵ったのはそなただけじゃぞ。」

いらんこと言うなよクソゾジジイ。

「わらわもす！」しは精靈と対話できる故、ぬしが異世界から参ったことはじつておるが。

身が固まるまでこの城にいたまえ。」

「ありがとうございます。」

私は素直に頭を下げた。

「まあまあ。そなたがわらわに頭を下げる」となぞない。

おぬしは【漆黒の少女】であつ、【導く者】でもあるのだが?  
わらわがこの国の統治者なら、おぬしはこの世界の統治者にもなりえ。

おぬしはこのせかこの誰よりも立場が上なのじゃよ。

そうだ、レンバルト。

おぬしはどひせ難じや わい?

ミハ殿。遠慮なくこのつを使ひてよござ。

それから ぬしの使い魔 たしかイオリといつたな?

そのものにもよろしく頼むわ。」

それだけ言つとジョーハヤさんは出て行きました。

これで心置きなく脳内プレイ（ただしギャルゲーに限る）ができる。

## #6 (後書き)

名前適切ですみません。  
ちなみに「ギノス」というのはギリシャ語で赤といつ意味です。

## #7 (前書き)

今回はレンバルト君視点です！

彼にはまあいろいろとがんばってほしい次第です。〃〃

こんなど駄文・乱文だらけのあれな文章ですが、  
どうぞお付き合いください。

## SEID レンバルト

世界を守る3本柱が召喚された。

いまやこの世界ではこのニュースで持ちきりだつた。

そしてそのうちの一人、【世界を導く者】がこの国にいるときだが俺は正直興味がなかつた。

俺は一応この国の第三王子といつてになつてゐるが、

俺はまだ成人していないし、たいていの国の仕事は兄貴たちが片付けていた。

俺が外に姿を見せるときはなにかの式典だけ。

いつも城の中にこもつて【研究】をしていた。

この国のことも世界のことも、俺にはまったく関係ない。

ずっとそう思つていた。

だけど、俺は見てしまつたのだ。

【漆黒の乙女】を。

その少女が入ってきたとき、生まれて初めて俺の中の【なにか】が動いた。

なんのかはわからない。

たとえばそれが【恋】なのか。

たとえばそれが【憎悪】なのか。

たとえばそれが【嫉妬】なのか。

俺には今も、ずっとわからない。

でも、確かに俺は彼女に惹かれた。

生まれて初めて、他人に惹かれたのだ。

俺が惹かれたその少女はとても神秘的だった。

そして、美しかつた。

少女は純白のワンピースを身に着けていたが、

その髪と瞳はまさにその「一つひとつ」ふわわしい漆黒だった。

彼女が精霊を従えていたこと、あるいは、それだらうが、それにしても、

その少女は神秘的で、美しかつた。

そして他者を惹きつけるカリスマ性があつた。

きっと兄貴や親父も同じことを思つたに違ひない。

いつもにこやかな微笑を浮かべている上の兄貴が、微かに動搖しているのがわかつた。

その少女はミィーと名乗つた。

そして一番驚いたのが、少女の心の中の弦が出来た。

俺と親父は他人の心の弦を感じることが出来た。

親父はきちんと制御できるらしいのだが、俺はまだ使いこなせない。

勝手に他人の声が聞こえるのだ。

それはそれで面倒な力なのだが、多分この力を使って一番驚いたのがこのときだつた。

俺が今まで知つてゐる女で、俺たち兄弟みて赤面しなかつた奴はない。

少女は心中でなんと言つことかため息をついたのである。

そして俺には理解できない単語を並べて

やだ。

といつたのである。

ことあること一元の王である親父をクソジ（以下省略）呼ばわらし、

上の兄貴を流されやすそうな優男、

下の兄貴をお腹真つ黒（弄ぶ・・・）

よく初対面でここまで罵詈雑言を吐けるな、と俺は思つた。

ここまで見た田と中身が一致しない人間は始めてみた。

親父は俺が何を思つてゐるのかを見透かしたよんで、

俺にこの少女の世話を押し付けたのだ。

この少女の訪れは、俺のこれから田の常の変化を告げていた。

とつあえず国王の謁見（？）は終わったみたいですね。

さて・・・。

これからどうしようかな。

なにが理由でここに飛ばされてきたのかもわからんないし（世界を救うとか抽象的すぎだしー）、

情報収集から始めないといけないね。

そういうやイオ、どこに行つたんだろうか・・・。

まあとりあえず帰らづばー！

私はさつきあてがわれた着替の部屋の扉を開きました。

すると、着せ替え人形にされている哀れな使い魔がいました。

これはびっくり！！

だつてイオ君が着用しているものが

いわゆるメイド服だつたんですもの……

「ますたあ――――!」

涙目で私を見つめる使い魔と、満面の笑みのメイドさんたち。

双方を見渡して、私は無言でメイドさんたちに指をつぎだしました。

ぐつじょぶーと。

「まつ、ますたあ――――?」

「めんね。

「すつじょべ、似合つてゐる?」

鼻血が止まつないので、そろそろ退散しましまつか。

そして「つわづとメイドさん」耳打ち。

「いいのがあつたら、とつておこてくださいね。」

それは主人からの着せ替え人形としての使用許可でした。

外に出ると、第三王子が扉の外にいました。

まあーなんたる偶然でしょう。

・・・。

もしかして、私、フラグ建てた？

いやいやいや。

その可能性は否定ーー！

この王子様は国王様から『漆黒の乙女の面倒を見よ』っていう命令がでているんだもの。

「ついて来い。」

そういうて私が連れてこられたのは、超 巨大図書館でした。

「ここには、この国のほとんどの書物がある。

この世界の歴史についての本も沢山ある。

自由に使っていい。」

えーっと、この男の子は私が全然この世界のことを知らないことを心配してここに連れて来てくれたわけか！

意外に気が利くんだねえ。

「ありがとうございます。」

ぐるつと第三王子に向かると、私は呪文を唱えました。

「　召還　」

すると、ぽんつとかわいらしげ音をたてて精靈たちがたくさん飛び出してきました。

『おとめだーー.』

『ほんとだーー.』

『あやか、こんなちんけなとこにこらつしゃないとほーー.』

『やつほーー.』

『　』にある本の数だけ精靈さんが飛び出してきます。

「これほーー.？」

後ろにいる第三王子もただならぬ力の大ささを感じて居るのかもしれないですね。

「私に、貴方たちの知識を授けてほしに。でもねー.」

精靈さんたちは少し考えて、いつこーました。

『ざとねんだけどー』

『それはできませんー』

『『もくたけのむかしむねー』

『「ともおおこでやー』

『「おひなひとおひなひとあるからー』

『「もくたけをうなこられただけの一ー』

『「すべつぐがないのやー』

『「それいー』

『「もくたちがかかるのはー』

『「かなりかしづじつとせかきつませんー』

精靈さんたちがおしゃべりしちょんぱりしています。

『「おやくにたてなくてー』

『「わいじわいなーのですー』

「「うう。 ありがとひー。」

私は図書室を後にしました。

はあー。

私はため息をつきました。

当てにしていた書物からの効率のよい情報収集はさすがにむりか・・・。

そういえば、この第三王子様に接觸を図るのは、頭よくない？

「えーっと、そこのおーじさま。」

びくっと、第三王子の体が動いた。

えー。

なんですか、私そんなに嫌われてんの？

軽くシヨツク・・・。

「別に、そういうわけではないっ！・・・」

突如第三王子がしゃべりました。

え・・・なにコイツ。

地の文まで丸見えなん？

ちよ。こまるわね。

「 封鎖 」

これで、大丈夫？

あ、うん。大丈夫かな。

「えー、王子様。

こほんこほん。

うーんとね、この通り私はまあ異世界から召還され散つた、

かわいそーでかよわい女の子なわけですわ。

だから、この世界の常識なんぞが通じない私にいろいろ教えてくん  
ね？？

くつそ。

もつと対人スキルを上げておくべきだつた！！！

ろくに学校も行かずに（俗に言つ不登校である）、

家でだらだらネットゲとギャルゲなんてしてゐからかあ・・・。

自業自得？？？？

でもでもでも――――

もともと私がありえないはずのこんな世界に囚縛されたのになれよ。

神様のせいだあ――――――――――――――――――――――――

「へへへ。今度会つたら殺ス。」

思わずつぶやいた私の剣幕に圧倒されたのか、

王子様は「ク「クと頷いてくれた。

そして重たそうに口を開いた。

「俺のこと、名前で呼んでいい。

じゃあ明日、第23執務室。」

なんか、無口つづーより根暗??

顔はイケメンなのに、根暗??

「ありがとう、レンバルト・・・さん?..」

私は「惑いつつ、名前で呼んでみると、つい若き少年は、

顔を真っ赤にして去つていった。

「つーか、今絶対、フラグ建つたよなあああ――――――――

「-----」

「こんな高感度上昇意味ないですよぉーーー。」

そして私は急にふりつと着て、その場にぱたつと倒れてしまった・。  
・。

#1-0 (前書き)

はい。

割と急 展開です。

すみません・・・。

はい！

気がついたらサフサフのベッドでした。

そしていろんな人が私の顔を白い顔で覗き込み

精霊さんたちは私が目覚めた瞬間テンションが上がりまして

一  
え  
二  
と

## 口を開けた瞬間、

「おお、おおた――――――」

•  
•  
•  
○

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
○

抱きつかれました。

泣きつかれました、使い魔に。

あー思い出した。

私は今、異世界トリップしてたんだ。

この間、0・3秒。

「乙女?！」

いろんな使用人っぽい人たちも、喜んでいます。

私は、

私は、啞然としました。

本当に、心の底からびっくりしました。

たつた一人の、

こんな無力な小娘の体調に、

これだけたくさんの人たちの心を動かすこと。

こんな私の無事を、

こんなに沢山の人たちが、喜んでくれるなんて。

本当に、これは本当に

「ふざけてますよ。」

声は震えていました。

「ありがとうございます。

体の調子を確かめたいので、

すみません、少しだけ一人にしてください。

精霊さん、あなたたちも。『ごめんね。』

そして、納得したように人々は去つていて、

これが本来あるべき姿なので、

急に寂しくなつて、

心細くなつて、

うれしくなつて。

涙が溢れてもました。

あーあ。

「みんなの【おんなのこ】なんかじゃない。

ましてや【世界を導く者】なんてもつてのほか。

私は、私は、

ただの【おんなのこ】だつた。

そうだ。

私は、私の本質は弱虫。

哀れな【おんなのこ】。

報われない【いじめられっこ】。

私なんかが、こんないろんなひとの心を動かしていいわけがない。

ああ。

いまさら分かつた。

私は強くて守られた、乙女ゲームの主人公なんかになれない。

弱いけどハーレムエンドを築けるよつな、ギャルゲの主人公なんかにはなれない。

だつたら、

ダッタラ、ワタシハ、ワタシハモウ・・・。

逃ゲルシカ、ナインジャナイカ。

こんなの、こんなの反則だ。

だつて私は、ただの女の子なのに。

「ばかみたい。」

そう。舞い上がつてた自分が馬鹿だった。

私のこんな卑屈な性格はまだ消えてくれないし、

私はこの世界にきてまでも弱虫で、

人類最強の力を手に入れても、

私はまだ【弱い】ままだ。

涙が溢れてきた。

おいおい自分急展開ワロタつて、つむじみたいくらいいこ、

私の心は高速で弱つていく。

あーあ。

本当に馬鹿だ。

「もう、いいや。」

私はそういつて、前の世界から逃げた。

別次元に逃げ込んで、

樂ちんな世界に居座っていた。

きつと、それを繰り返す。

でも、でも私は 。

「また、繰り返すの？」

もう一人の私に問われたら、

私はどうする？

「そんなの、やだな。」

それが本音、か。

たぶん、これが本音。

逃げたくない。

立ち向かいたい。

向き合いたい。

そう、私は

強くなりたい。

やつ思へるへりこにはなつた。

「よこしょ。」

おこじねまくさこ掛け軸、ひともく、

私は立ち上がった。

あとほんの少し。

強くならう。

だつたらあとでしだけ、

前を回りへ。

それでいい。

そして、ちよつとまつ、

ちよつとまつ、

【それ】に気づかせてくれたこの世界に、

恩返しをしたいへ。

たぶん、それでいいんだ。

『やつと田覚めたか。』

そのとき、私の内側から声がした。

「・・・はあ？」

おまえ、だれやねん。

『私は三本柱を助く者。

再び我が眠りから覚めたといつ」とは、

三本柱が現れたことのしるし。』

「はあ。」

なんだろ?これ。

設定的には、主人公に的確なアドバイスをくれる近所のお姉さん  
でいいの??

『私は三本柱を助け、力を保管する者。

いまからお主に【導く者】の力を解放しよう。』

そういうて、私の内側から真っ白な光が現れて、  
私はまたまた氣絶してしまった。

す  
一。  
た  
せ  
ひ  
さ  
か  
つ  
た。

#11 行間 “私”（前書き）

これは複線かな。。。

わりとシリアスです

## #11 行間　　〃私〃

そんなにむかしむかしではない昔に、  
私はちゃんと幼稚園児（皆勤賞）をやつて、  
小学生（葬式以外皆勤賞）をやつてました。  
でも、私は中学に入学し、その1ヶ月後に  
世間で言つ不登校に、  
さうには引きこもりになつてしまつたのです。  
それには深い事情がありますが、  
まずは私に親しい2人の人物を  
紹介することにします。

まずは一人目。

私の義弟の篠原哉斗である。

私は「ればっかりはとあるアニメやゲームの主人公に共感できるのだが、

「Jの義弟、重度のシスコンであり

もつ地球から飛び出していくくらいコチートなのである。

顔は良くて、頭も良くて、運動神経は「れでもかつ……」ほどのいい。

くわつ。

なんでここののが義弟なんだ。

でも、小セコヒは良かつたんだ。

まだ義弟ではなかつたし、

よく女子に間違えられて、

今だつたら絶対にあーんなことやJーんなことを……。

・・・Jほん。

こまや私よりも20歳は高い。

へいめじゅ。

というわけで女子にはモテモテ。

男子には人望がある、いにチート野郎。

こんななんの義姉なんてうくな事ないぞ。

私が小6の冬に、

お母さんと義父さんが再婚して、

私たちは姉弟になつた。

そして小6の3学期になつて、

あいつがうちの学校に転向してきて、

持ち前のシステムパワーと、ハーレム機能を發揮し、

私はめでたく逆恨みされて、でもまじめな私はきちんと学校に通つた。

そして中学は、

私の体のうちの数少ない使える機能、そつ【頭】をつかい、

義弟を全寮制で山の中のチート学校に入学させた。

（まあ代々彼の家系はその学校に入ることになつてたんだけどね。）

そして私はその3学期に唯一、私に普通に接してくれた男の子に恋をした。

まあ、ありえなくはないよね。

その男の子が

柊疾風

こいつはクソ明るくて、かつこよくて、こいつの間にか皆の中心にいる、

太陽みたいな奴。

そして私の幼馴染である。

疾風は、皆から敬遠されて、影でかなりひどい逆恨みにあつた私を、

唯一支えてくれた。

うれしかった。

私の素直で単純な部分が動くくらいには、いい奴だった。

で、小学校の卒業式。

これまたテンプレな展開でしてね。

私は勇気を振り絞つて彼に告白しようとしたよ。

すでに先客がいて、その子の告白を断つてしまっていた。

私はどうしたって？

だつてこの会話を聞いたからだよ。

「私の告白を断つたのって、篠原さんがいるから？」

「…・・・へ？」

「だって、いつもあの子のこと庇つよな、柊君。

すきなの？あの子の」と。

彼女の囁つきがそっとするほど怖かったんだ。

にぶちんな少年は、そんなことにも気づきもしないで、  
うぶな少年は顔を真っ赤にして、

「だつーだれがみんなブサイクをつーーー！」

セツノって、逃げてしまつたよ。

彼女はこつこつ笑つてこつこつた。

「聞いたでしょへやまあみる。」

そして中学ではもう疾風にかかわらなによつにした。

そしたら疾風は私に付きまといよになつた。

前と同じよつ。

昔に戻りたがつた。

するとまたまた嫉妬と逆恨みがでてきて、

私は学校にいられなくなつた。

疾風にあつのがいやで、

私は家に引きこもつた。

もともと両親はほとんど家に帰つてこないし、

疾風は長期休暇しか家にいない。

家族にじまかしようはいくらでもあった。

そんな廢人が、私、篠原未依なのである。



「あ・・・？」

私はまたまた倒れてしまつて、

どうやらまたまた皆が心配してくれてゐるみたいです。

いつもの私が復活したのと同時に、

三本柱のなんたら～ってやつも甦つて…。

ここまでは私の頭の中の状況確認。

そこで、そこそこここにいてはいけない人がいた。

ここにいるはずのない人。

現実の世界の住人が。  
リアル

「・・・は？」

アリエーは、机からを睨んでいる某義弟と、

気まづかずつに手を伏せている某幼馴染がいました。

「アーヘ様、この方たちは……その、

ミヤ様の知人だと言い張つていまして……。」

メイドさんAが言い終わる前に、義弟君が動きだしました。

「すみません、俺たちは姉ちゃんと積もる話があるので、

しばらく退席願います。

「ね、姉貴？」

私はアーヘと頷くしかありませんでした。

それを見て、不安そうに使用人さんたちは出て行きました。  
(そりや、さつきと同じパターンですか)

「ますたー、ぼく・・・。」

イオもひからを見ています。

「大丈夫。なんかあつたら、呼ぶから。」

そして、私たち以外の全員が部屋を出て行つたところで、  
義弟君があ、とため息。

「姉ちゃん、なんで言わなかつたの。」

「なつ、なにを？」

私はつこびびって声が裏返つてしましました。

だつて、哉斗は、面影はあるけれど、

なんか前よりも成長してゐるんです、全般的に。

細マツチョになつてるわ

「なにをつて、わかつてゐるだろ。」

「『ヒーロー』の世界にこののかつて…やつや、いつかがやめた…」  
「」

「ちびーるー」

私はがんばつしませぐらかわつとつまつたが、

途中でわくわくられてしまつました。

「姉ちやん、なんで泣くてくれないわけ?」

不登校だつて。弓きこもりだつて。

姉ちやん食事と風呂以外全部ネットしてんじやん。

学校も行かず」。

んで俺こも、父さんこも義母さんこも嘘つこつたわ。

なんでだよ ツ。」

哉斗は、私のことなの元で嘘じやうじやう、つりあうじやう、#ぬじやうじやう

向こう悔しそうだつた。

普通なら、『『『めんねつ、かなくん・・・。』』』

みたいな展開になるのであります。

しかし私は究極に卑屈なんだよ、哉斗。

だから今の私の中には苛立ち。

怒りが爆発しそうだった。

「そんなに俺のこと信用できなこのかよッ……」

その一言にフツツンと、私の堪忍袋の緒が切れたよ。

私たちには血がつながってなくても家族なんだよ。

なんで言つてくれなかつた?

言えるわけないじやん。

あんたたち、それしつたら間違になくなっちゃうんだよ。

女の子にひえあげるなんて、サイテーよ。

んなこと体内にさせられるわけがないでしょ。

それくらこ考えなよ。

なんのためこの頭がついてるわけ??

なんのためのチートなわけよ??

私の剣幕に押されたのか、哉斗はしょぼんとしていた。

「だからって、姉ちゃんが傷ついていい理由になんてなんねえだろ。

それにそいつは姉ちゃんにありえないことしたんだぜ??

それに、その理由が俺や「マイシ」なら、それは俺の・・・。

「違ひでしょ。

それは『俺たちの責任』とかいつたら殺すわよ。

いい。

それだけは言わないで。

いつちやいけないでしょ。

あんた、失礼だよ。

なに他人の責任背負おうとしてるわけ?

偽善者きどりもいいところよ。

私は好きであんたたちと一緒にいるの。

学校に行け、ううん、行かなくなつたのも、

全部私が決めたこと。

これからも、全部私が決める。

私のやること奪わないでよ。

私の十字架、勝手に背負わないで。

これは私が一生もつて行くの。

私は乙ゲーの主人公じゃない。

守られるアホで可愛らしい主人公なんか、だいつきらい。

私は強くなる。

もう、逃げないから。」

そして私は自然に微笑むことができた。

久しぶりに、哉斗と、疾風に向かって。

「あんたたちも、逃げんなよ。」

私は、未来の私に宣戦布告をした。

### #1-3 (前書き)

更新がたびたび遅くなっていますみません・・・。

今回はまあ急展開??でわないとthoughtしますが・・・。

さてー。

私、何を恥ずかしい台詞言つてるんじょつか？

いやあね。

わかりますよわからぬもないですよええ。

うん。

なあ久しぶりに現実の世界の住人とであつて混乱してたんじょ。  
う。

でも、なんでこんな展開になつてるんじょかねえ？

なんで私、押し倒されているんじょか？

えつと、話は先ほどの台詞に戻ります。

その後、義弟君は満足げに出ていったんですね。

んで私はこの流れに乗つて、たつたと退場じよよつとしまったよーー。

そう。脱兎の如くーー。

しかしそこで（まだフラグがあつたのか）幼馴染に呼び止められ  
ちやいました。

「未依、話があるんだけど。」

はい。美形特有のイケボで。

「なつ、なによ?」

思わず声が裏返つてしましました。

あれおかしいなあ。

こんな展開知らないよ???

「俺、お前に謝んなきゃいけないんだ。」

は?

「その…。お前に起つたにじめのきっかけは俺。」

「だからそれはアンタのツ 「だから聞けって。」

一瞬なにが起きたかようわからなかつたけど。

手でね、口封じされましてしまつたようです。

「その低級ないじめを拡大させたのも俺だし、操つてたのも俺だし、

挙句の果てに末依を学校から追い出したのも、俺。」

私は本当に言葉が理解不能になつてしまつたようです。

ええ…。はい。落ち着きましたが。

だがなんでそんな真似を・・・??

不思議そうにしていろと、疾風は言つてくわつて切り出しました。

今後は、私の独り言込みでお送りします。

「 そのや。俺の中に悪魔がすんでるんだよ。

（ なにその厨2設定？ ）

ソイツいわく【三本柱】の精靈の一人とかほざいてるんだけど、

（ つかもう一人つてアンタなわけ？？ ）

ソイツが出てきてから俺は力をもらつて、

（ ところには覚醒済みかあ。 ）

ときどきうちの世界にもきて勉強したんだ。

（ うわー そんな初心者ルートしらないんだけど。 ）

俺は強くなつたし、賢くなつたとおもつ。

（ それ自分で言つ？ ）

でもそこは俺を世界を守る勇者にして、元の世界に戻した。

（ すでに勇者気取りですかあ。 ）

俺は、俺は怖くなつたんだよ。

（ だからなにが？？ ）

俺はもう一般人じゃないし、そのあんま死なないし。

(もとから一般人じゃねーよ)

だから大好きな人に嫌われるかもしけないって。

(へー そうですか。)

お前に、嫌われるかもしけないって。

俺は悪魔にそそのかされて。

その人に俺だけしか残らないように頑張ったんだよ。

いつも輪の外にいるように。

大変だつたんだぜ？？

だつてそいついつも気がつかないうちに真ん中で立ちすくんでる  
んだもん。」

そこまで聞いて私の頭は真っ白になりました。

「はあ？

ちょっとちょっとちょっと…！

私、アンタにフラグ建てた記憶ないし？！？！

つかアンタ小6んとき私のことフツタじやないですか！！」

私、もう睡然。

疾風の言つ【大好きな人】は、家族とか友達とかじやなくて、異性として。

あいつの旦が、そう物語つている。

「なにこの展開？？

ちょっと待つて聞いてないよ。」

私があたふたしているうちに、

乙女ゲームの恒例行事ですが、

押し倒されました。

「あれ？あんなの照れ隠しにきまつてるじやん。

振つたつて言つけど、未依は俺のこと好きだつたわけ？

ふーん。

じゅおりで犯しておくなわけだ。」

みづかへ、疾風の言つた【悪魔】の意味を理解したといひで、

唇にやわらかーい感触のものが当たつました。

えつとですね。

もしかしたら、こちらの小説、ムーン様枠におこ越しするかもしれません  
せんが、なま暖かく見守つてやってください。

誤字脱字などありましたら、ご連絡お願いします。

#1-4 (前書き)

「ひつぢら幼馴染は変態ぞのひで。」

・・・。

ねえ。

いま私、キスされた?

うん。キスされた。

誰に?

昔の片思いの相手に。

そこまできてパチン、と目が覚めました。

私たちの間になつたピンク色の空氣なんてもつ関係ありません。

とりま、抹殺しようか。

そう思った瞬間、足が男性の急所を「ーん」と蹴り上げました。

「イッタ————ー！」

少年は、叫ぶ。

そりゃ、痛いだろ？

オトコの体の中で一番びんか（「ほんか。）

「ざまあみろ。私のファーストキス奪つからだ。」

「未依つて俺のことすきだつたんだろ……つて。まじ？」

未依、初めてだつたの？」

「これ、お前私のことこいつだと思つてんだ。

中2だぞ？ 14だぞ？？

引きこもつだぞ？」

これは云つて悲しいわ。

もちろん、一次元でならあーんなことも「ーんなこともあれだけ  
ビュウ

「じゃあ俺は未依の初めて、もうひちゅつたんだ。」

ちよ、勘違いされそつた言い方するな。

ちなみにアンタだつて・・・。

「俺？俺はもうすでに童貞卒ぎ」「はあ？」「

私はその一言でぶちつと何かが切れたのを確認した。

煩いな。こんちくしょう。

人を弄んでんじやねえ。

「ちちはテメエのせいで引きこもりなんだ。

ネットしてアニメ見てゲームして通販行って寝る。

そんな生活なんだよーー！

とにかく【怒り】といつ感情が私を取り囲む。

どんどん私が真っ赤になつて、真っ黒になつていいく。

ああ。私はどうなるんだろう。

『怒つてるの?』

そうよ。そうに決まってる。

『『『だれに？？』』

アイツに。ううん。私を取り巻いていた世界に。

『『『なんで？？？』』』

あの世界のせいで私は独りになつたんだもの。

憎いの。世界が全部。

だから、私は逃げたの

『『『『『じゃあ壊そつか？？？？』』』』

壊すの？いいね。壊しちゃおつか。

全部まトメテ。

壊シテシマオウカ。

ワタシヲ阻ムモノゼヨンブ。

『ワシテー。

だめだつ！！

おつと危ない。

明らかなる厨2思考に奔つてしまつた。

世界を壊したら、私の大切なコレクションが危ないことに気づいてしまつ……！

それだけは駄目。

「の命に代えてもそれだけはつ、守るのだ……！」

その刹那。

田の前に気絶した変態（幼馴染）が転がっているのを田撃した。

「私しーらないつ。」

「うだ。じばらくほつたらかじにじちやつた伊織のといじゅへ行こ

メイド服とかナース服とかを愛でよつ。

そして、少なくともいまは現実から逃れよう。

ねつ。

#1-5 (前書き)

久しぶりの更新ww

なんだか知らない間に、旅に出る準備が整つていたようですね。

「ううか、部屋に帰つて、」機嫌斜めな勇者様（私が）が部屋が真っピンクになつてゐるのを見て怒り狂い、「こんなとこわざと出でつてやるボケが。支度しりや懸呪いわ」と逆ギレしたらしい。

……。

「これ全部私だと？」

王様は「乙女がついて頭角を表された」とか泣いて喜んでゐる。きもいんだつづーの。

怒り浸透中の乙女を見た某使い魔君は氣絶しきつてしまつ。

そして今現在。

私は儀式の最中です。

なにやらハゲのオッサンがむにゅむにゅ呪文唱えてるしま

「貴殿に我が國、そして我が世界の命運を託す。

貴殿は常に我らと友にあり、我らは常に貴殿と共にあります。」

そして古びた杖みたいなもんをわたされました。

「「」これは【三本柱】しか使えない宝具でござります。貴方と世界に幸あらん事を。」

はあ。

ん?

そういうや、私、この人たちの為に魔王とかなんとかとバトらなきやいかんわけ?

私に何かメリットはあんの?

『それはあるべ。

今まで空氣だつた三本柱の人、あ、もうサンティイーで良くなきかつこいいし』

三本柱の人改めサンティイーが言い出した。

『むしろ主は必然的に魔王を倒せばならぬ。  
でなければ主は自分のもといた世界に帰れないのだ。』

なるほど…。

つまり、ソックローで魔王を倒してきたりもとの世界に帰れるってこと?

でも、そこまで帰りたいわけじゃない。  
むしろいじ遠慮願うし。

『アーリーでアーリーでも、主導者としての役目もあるのだ。

そう簡単に旅は終わらぬ。

それは主の力どうじうの問題ではなく、世界の必然的事項。つまりは神からの因果によるものだからな。『

こいつテラ厨2じやないすか！

神からの因果とか

とにかく、私は歩き回ればいいんだろ？

世界を導くために。

【漆黒の乙女】は旅に出た！

……。

はい。みなさうにせばんわ！

【漆黒の乙女】はと私篠原未依は様々な人に見送られて魔王退治の旅に出たのです。

そして只今絶賛迷子なつ。

だだつぴるい森の中。

私は独り。

え？ イオですか？

もちろん連れてきましたが、森の中に入つた瞬間気絶＆猫化。

私の腕の中で、三途の川を渡りかけてやうです。

うん。

いろいろ問題あつありですが、あまり気にしないんです。やうこつこと。

うーん。これからどうしよう。

とぎとびと道を歩いてる最中。

ででーん！！

魔物登場っ！

「…はつ？」

巨大なんですよー魔物。軽く10mはあるでしょうね。

ゴリラが退化した様な形相です。

正直めっちゃグロい…。

「ウホッ、ウホッウホウホウホッホッホ。（うはは、ネエちゃん抱かせろよ。）」

うん。ちょっと黙ろうか。

思わずそのクソゴリラを殴り飛ばしていました。

昇 天！

え？何、何が起きた？！

私のストレートってそんなに破壊力ありましたか？！

その時、後ろでザワザワッと草が動く気配がしました。

「また敵かよつー。」

杖を構えた瞬間。

「ほそなごとにいたのかよ…。」

非常に可哀相な声が聞こえてきました。

「あー、おーじわせ。なんでほそなごのでいるやつかもしうつか。」

セイヒ居たのは「キノス王国第三王子様でした。

「親父に言われてきた。」

そつこつて差し出すされた紙。

漆黒の乙女 ミライシノハラ 殿

我はほの度あなたを召還し、魔王討伐の旅に送り出した。

しかし、よく考えてみると、女子を独りで旅に出すのは、  
何か危険なことだと思つ。

そのため、我が息子をそなたの旅に同行するよう申し付けた。

我が息子は、あつとそなたの旅に役立つと思つた。

我が國、我が世界の命運はそならう本柱にかかつてゐる。

どうか、そなたの旅に神の御加護が在らんことを。

と、律儀な日本語で書いてある。

…日本語？

おかしい。この世界では【日本語】は通じないはず。

「おーじゅま。この文字読める？

そういうふうにおーじゅまからの直々のお手紙を見せる。

「…」れば【神語】だな。俺には読めない。

「神語？なにそれおこしの？」

「そもそも食えん。」

だめだー！

「の人[冗談通じない！

「神語とは、もとより神がこの世界にもたらした言われる言語だ。

世界の基盤となつてこる言葉、とでも云えばこー。

「日本語があ？世界標準語にもなれない言語が？」

「これは、お前のもとよつ使つていた言葉か？」

「うふ。母國語つてゆーか、今もこれを使つて話してゐる。

「俺には【赤の言語】レッド・スペルこじか聞こえないが？」

「れつどすペるー。」

「ああ。これががこの国の標準語だ。」

「国？国つてたゞあんの？」

「… はあ。」

「一じわため息をついた。

そういう人の人の名前なんだっけ？



## #1-6 (後書き)

次回は、説明回ですっ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7402r/>

なんで私が異世界トリップなんぞいう乙女ゲームのような状況におかれている

2011年12月19日10時48分発行